

*時計庫の痕跡を発見

写真1は年代がはっきりしないのだが古い東京天文台の建物配置図である。大赤道儀室の建屋部分（ドームが載る部分）、太陽塔望遠鏡の半地下の分光室が建設されたのが大正15年（1926年）である。図書館が建設されたのが昭和5年（1930年）であるが、図書館が記載されていないから昭和5年（1930年）よりは古く、大正15年以降の配置図である。

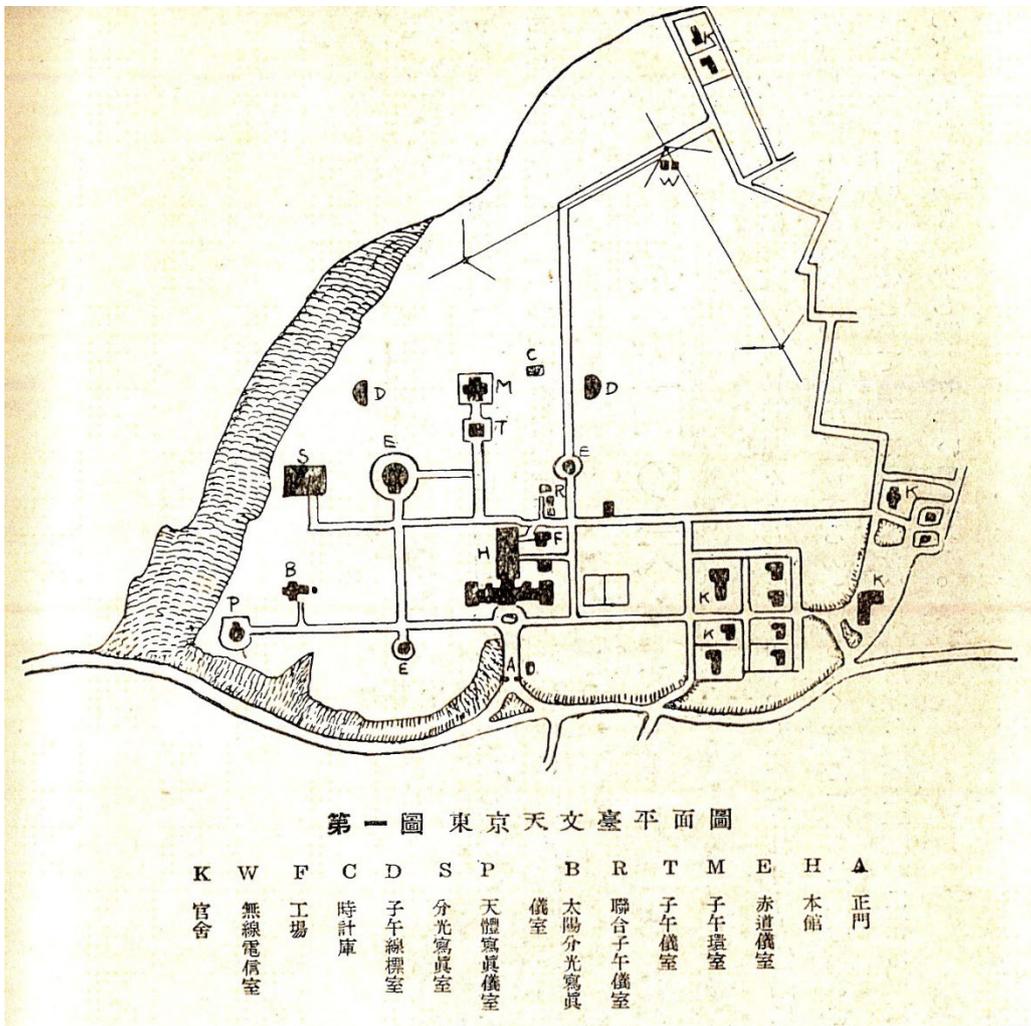


写真1 1926年～1930年の間の建物配置図

この配置図に書かれた14棟の建物は、A:正門、H:本館、E:赤道儀室、M:子午環室、T:子午儀室、R:連合子午儀室、B:太陽分光写真儀室、P:天体写真儀室、S:分光写真室、D:子午線標室、C:時計庫、F:工場、W:無線電信室、K:官舎である。アルファベット表記は、CはClockのC、EはEquatorのEのように英語表記の頭文字だったり、Hは本館のH、

Kは官舎のKと気まぐれである。それでも太陽塔望遠鏡室が分光写真室となっていることから昭和5年（1930年）以前の図であることが分かる。

今回はC:時計庫の痕跡の発見（写真2）である。東京天文台75周年記念誌によると、時計庫は11坪あったとある。11坪と言えばレプソルド子午儀室と同じ面積である。



写真2 時計庫地下室への入口

今回発見された痕跡は、時計庫の建屋ではなく時計庫の地下室への入り口と思われるコンクリートの構造柱である。地下に降りる鉄梯子が残っている（写真3）。



写真3 地下の時計庫に降りる鉄梯子の先端部が見える

この時計庫の痕跡は東京天文台の建物配置図に書かれた C 地点と思われる場所にあったのだが、そこは、現在は「はちく」と呼ばれる真竹の 1 種の深い竹藪の中でその存在が分からなかったのである。80 歳を過ぎた昔の子午線部の古老と一緒に竹藪に分け入りやっと発見したという次第である。

昭和 41 年（1966 年）に東京天文台の北研究棟が出来た際、その建物の北側に地下室の時計室が出来たが、それ以前に北研究棟の南側に天文時部の建物があり、そこに地下室があって、そこが時計庫だと聞いた記憶がある。子午儀、子午環の観測には精密な時計が必要だったから、天文時とは別に時計庫を持っていたのかもしれない。

今回発見した時計庫の痕跡は、子午線部が北研究棟に移る前に研究室として使っていた辻研と呼ばれた第 2 実験室の南にあった 11 坪の建物の地下である。現在では竹藪の落ち葉にほぼ埋まってしまっているが古老の話では深さが 4~5m もあった地下室だったという。またぞろ、探検したい気持ちが湧いてきた。

これらアーカイブ室新聞の記事にお気づきのことがあれば、編集者中桐にご連絡いただければ幸いです。中桐のメールアドレスは、arcnaoj@pub.mtk.nao.ac.jp